



よちか。

b-ryuf-b

「よちか。」 登場人物表

武田頼義〔たけだ よりちか〕	25歳	「ARK」の新参者
小田一技〔おだ かずえ〕	27歳	武田の先輩
山本爽〔やまもと そう〕	1歳	同上
佐久間大慈〔さくま だいじ〕	41歳	同上
前野哲夫〔まえの てつお〕	33歳	同上
石川〔いしかわ〕	55歳	ESP部予知課・課長
服部〔はっとり〕	20歳	同課・車両部所属
剣持加奈子〔けんもち かなこ〕	30歳	ARK日本支部長
御堂友泰〔みどう ともやす〕	23歳	大学院生
御堂恵子〔みどう けいこ〕	48歳	御堂の母
柿本〔かきもと〕	22歳	御堂の友人
葉科羽角〔はしな はずみ〕	19歳	御堂の後輩
田沢〔たざわ〕	59歳	教授 EPC (エネルギー推進委員会) 副委員長
渡辺〔わたなべ〕	55歳	ラーメン店主
大島〔おおしま〕	42歳	刑事

フォーラム会場

聴衆が集まってきている。

立看板に『EPC〔エネルギー推進委員会〕定例報告会』とある。

同裏手・控え室

原稿を手に、何かを探している田沢。ノックの音に、扉を開けながら、

田沢「ああ、御堂君、アレはどこに……ん？」

意外そうな顔になる。そこに立っているのは柿本だ。

柿本の背後を窺う田沢。

柿本「教授、そろそろお時間ですよ。御堂なら、田舎に帰省しているってお伝えしたじゃないですか」

田沢「そうか、そうだった。父君の7回忌があるのだったな。えっと、君は…」

柿本「やだなあ、僕は柿本ですよ、教授のゼミの。今日は御堂の代役です」

困り顔の田沢。柿本に何か言おうとしたところで、葉科羽角が入ってくる。

羽角「教授、お支度は整いましたか？」

田沢「お、葉科君。それがね…」

羽角「これ、お忘れじゃないかと思って」

田沢に補聴器を渡す羽角。

羽角「御堂先輩から、くれぐれもって頼まれていました。やっぱりでしたね」

田沢「(安心)いや、助かる。そう言えば、御堂君のご実家は、確か能登だったね」

羽角「はい。原発がすぐ近くだとか。教授も設計に参加なさった、例の最新システム搭載型の」

田沢「そうだ、そう。ついでに見て来られたら良かったんだがなあ…彼にはあそこは」

柿本「あ、もう時間ですよ、教授」

羽角にネクタイを整えてもらい、田沢が壇上へ向かう。

EPC副委員長として紹介され、会場から拍手で迎えられる。

羽角と柿本が、舞台袖で見守る。

渋谷・駅東南側

並木橋方向から、ノンビリと歩いてくる武田頼義。精気のない顔つき。

渋谷駅方面へ向かい、途中にあるWINS〔場外馬券売場〕を見やる。

レース当日で、馬券を買い求めに来る大勢の賑わい。

武田「……(大きく、ため息)」

また歩き出す。トボトボと。

N〔ナレーション・武田の独白〕「あ～あ…あの時、あそこにさえ行ってなきゃ、今頃は」

回想〔イメージ〕…WINS内

武田は、大勢の熱気に戸惑いつつ、中継モニターを見上げる。

N「断っておくが、俺はギャンブルはやらない。ただ、なぜかあの日は、人の流れに飲み込まれたというか、気付いたらそこに居た」

戸惑いつつ、パンフレットを手取るが、やり方〔馬券の買い方〕がわからない。

その時、ふと武田の脳裏に3つの数字が浮かび上がる（イメージ映像）。

N「何だかよくわからんうちに、なんでか頭に数字が浮かんだ。モノは試しと、見よう見マネで馬券を買ってみた。これが、いけなかった…」

不慣れた武田は、壁の案内ポスターにある手順に従ってシートに記入し、券売機で3連単の馬券を購入する。

メインレースが出走開始。

モニターを見上げる武田。人が多過ぎる上に、位置が悪くてよく見えない。

その内、場内は不安そうなどよめきが広がり、野次や罵声が所々で悲鳴のように聞こえる。そして、一瞬、実況も周囲の客も息を呑んだように静寂に包まれたかと思うと、次の瞬間には周りが全部、悔しそうな嘆きと共に馬券を捨てる。

一様に、信じられない結果に驚き、嘆いている様子だ。

実況中継が「史上空前の大穴」と驚きを交えて解説しているのを聞きながら、武田は自分の馬券を見る。

N「とんでもないのを、当てていた…」

機械での換金にエラーが出て、窓口へ馬券を差し出す武田。

途端に奥では係員たちが右往左往と大騒ぎを始めるが、武田自身には、この事態がよく理解できていない。

N「後で聞けば、どうやら億に近いとこまで行ってたらしい。けど、俺がその大金を手にはすることはなかった。俺は、見つかったのだ」

肩を叩かれ、振り向くと、武田は大勢の警官にすっかり周囲を囲まれている。

武田を囲んだ大勢の警官を掻き分けて、小田一枝が姿を現す。

一枝の、スーツをキッチリ着こなして隙のない態度に、武田は怯む。

一枝「この人です」

警官「確保！」

武田は、ワケもわからず一斉に警官隊に取り押さえられる。揉みくちやだ。

一枝は、窓口でJRAと何か交渉中。

茫然とするばかりの武田が、外へと連行されていく。それは一瞬の出来事。

N「言っておくが、インチキやイカサマの事じゃない。見つかった、と言うのは、この“数字が見える”という力〔ちから〕の事だ」

回想2...渋谷警察署内

取調室。座らされた武田は、目の前に立つ一枝と剣持加奈子から次々と書類を呈示され、警官が勝手に武田の手をつかんで書類に拇印〔ばいん〕を押していく。

さっぱりワケがわからない武田は、されるがままだ。

隅で様子を見ている大島が、暇そうに頭をポリポリ搔いている。

N「警察と一緒に俺を捕まえた、この組織はARK〔アーク〕って名前だった。

そこのお偉いさんが言うには、俺には数字が見えるんだそうだ」

馬券を買った時の記憶（ふいに頭に数字が浮かぶ光景）が蘇る。

N「ランダムに、未来に関する重要な数字が脳のどこかを、えっと...まあ、難しい事は俺にはよくわからない。とにかく、そんな能力の持ち主なんだから、組織で身柄を預かる、と勝手に決められてしまった」

最後の書類に、加奈子がドンと「認可」印を押す。

所属欄には「予知課」と記載されている。

渋谷 路上

駅へ向かって歩く武田。またため息。

N「全く実に迷惑千万な話だ。何が一番ムカつくって、せつかく憧れの職場に就職が決まって、張り切って働いてたんだぞ？それをムリヤリ辞めさせやがって...」

足を止め、思わず拳を握り締める。

回想3...某出版社

漫画雑誌の編集部で働く武田。編集長に怒鳴られ、漫画家に頭を下げて愛想笑い、大量の原稿を運ばされる。

しかし、出来立ての原稿を見る目は、嬉しそうにニヤけている。

渋谷 路上～警察署～雑居ビル

武田は拳を下ろし、大きくため息ついて、肩を落としたまま歩き出す。

N「とまあ、そんなこんなで仕方なく...本当に仕方なく、俺はその新しい職場、ARK日本支部に向かっているとこだ。なぜかここを通り抜けて」

渋谷警察署内へ入っていく武田。

警官らの敬礼へ投げやりに応じ、エレベーター（移動する最中、網膜スキャンが行われている）から地下を通じて、建物の裏手へと出る。

細い路地の先にある雑居ビル。老朽化が著しいビルに入ると、階段で2階へ登る。

建てつけの悪いドアを開けると、意外に広いスペースが展開する。

N「(あくび)はい、ご到着、と」

後ろ手にドアを閉める武田。

ドアには紙で『ARK日本支部ESP部 よちか。』と表記されている。

同・予知課室内

部屋の中には、一枝の他にも、思い思いに過ごす課員の面々が出勤している。

武田が「ちいっす」と腑ぬけた挨拶をしながら席に着くと、佐久間大慈だけが陽気に手を挙げ、またプリンを食べる。

佐久間「よう新人、相変わらずシケてるな」

武田「佐久間さんは、今日もお元気そうで」

佐久間「美味しいモン食ってりゃ人間幸せになれるんだよ。お前も食生活充実させろ」

N「太っちょ...通称トッチョ。見た目が伊集院光に似てなくもない。こんなでも能力は凄い...らしい。見た事は無いが、人為的災害や経済関連の予知ができるんだとか。

しかし、相変わらず食ってばっかだな、コノ人」

佐久間は競馬・競輪・競艇と、ギャンブル関係の雑誌に目を通しながら、買い置き
のデザートを平らげていく。

武田はi P O Dをイジりながら、窓外を見やっため息づく。ふと横を見る。

課で備え付けのデスクトップを差し置いて、自前のノートパソコンを広げて黙々と
キーを打つ前野哲夫。

課内で、前野と一枝だけが、キッチリとスーツを隙なく着こなしている。

N「いつも無口な、元・警察庁のエリート眼鏡。この人は自然災害に関する予知ができ
る...らしい。株やってるとこしか見た事ないけど」

武田があくびしつつ目を転じると、課長デスクでくつろぐ石川が居る。

石川はワンセグ端末で囲碁教室を観ながら、実際に盤に碁石を置いていく。

小気味いい音が部屋に響く。

N「ここの課長...最初、一番興味を持ったのがこの人だった。何せ、能力があれば、
下駄占いだ。知ってるだろうか？下駄を飛ばして、止まった向きで天気を当てる。
百発百中らしいけど...やっぱり俺は直接それを見た事は無い。つか、何でこの人が
課長なのか。ここの最大の謎だ」

いつの間にか、一枝が真横に立っている。

一枝「武田さん」

戸惑う武田に書類を渡して、冷ややかな目で見下ろしている。

一枝「何度も言わせないで。交通費は最短距離でしか申請は通りません。書き直してき
て下さい」

武田「え～、また書くの？」

一枝「.....」

武田「(視線を逸らす)ハイハイ、わかりました」

一枝がキビキビとデスクへ戻ると、見えないように小さくため息づく武田。

N「おっかねえ。“女傑〔じょけつ〕”なんて陰で呼んでる事を知ったら、なに言われ
るか...お気付きだろう。コイツが俺をココへ連れてきた張本人だ。コイツときたら」
知らず拳を握り締めている武田。

佐久間「何やってんだ、お前？」

武田「あ、いえ、別に(スマイル)」

一枝は事務仕事で適度に忙しいが、たまに手を休めて、趣味の観葉植物を見つめる
時だけは、優しい目になる。

N「女傑は半径2以内で誰かが能力を発動させると、それを完璧に察知できるんだそ
うだ。俺自身が被害者なんだから、間違いない。能力探知機という訳だ。まったく嫌な
能力だ」

武田は書類を前に、ペンを指先でクルクル回している。

手元が狂って前野のキーボードに当たる。

前野「...(無表情にチラと武田を見る)」

武田「ども、すみませんでした」

ペンを取ろうとすると、赤ん坊の泣き声が響く。一枝が素早く立つ。

N「そうそう、もう一人居た。あの泣いている赤ん坊も、俺の先輩だった」

一枝がベビーベッドから、山本爽を抱きかかえる。

慣れた手つきでミルクを与えると、爽はピタリと泣き止む。

N「この001...なぜそう呼ぶかは、石ノ森章太郎を知ってる人ならわかるだろう。

女傑を003と呼ばないだけマシだ。この一見赤ん坊...いや、実際に赤ん坊なんだけど、こいつも能力者、らしい」

一枝は、乳幼児用発音練習機「ぼいすクン」を使って爽をあやしている。

氷のように無表情だが、爽がなついているのはわかる。

ぼいすクン「げ、つ、ぷ」

一枝が爽の背中を軽く叩く。豪快なゲップが轟き、石川はさり気なく窓を開ける。

N「001は、人の生き死にに関わる重大な予知を言い当てる...らしい。国内全てを網羅するというから、相当凄いだろう。けど、当然これも、見た事は無い」

一枝「課長、排気ガスが入ります」

石川「あ、こりゃいけない。はい、はい」

窓を閉める。騒音が止んで、室内にはキーボードと、碁石と、プリンと、書類を裁く音と、iポッドのイヤホンから漏れる音だけが気だるく漂う。

N「とまあ、この5人+俺で構成されているのが、この予知課だ。そしてここでの仕事は...仕事は.....特に無い」

武田はニンテンドーDSを手に取り、消音モードでゲームを始める。

N「いかにヒマを潰すか...ここではそれが最も重要なのだ。他に言いようが無い。なぜならここに居る全員が、自由に能力を発動できないからだ。信じられないだろうが、そのセイで来る日も来る日も待機、待機、また待機...定時になれば皆サッサと帰る。この繰り返しなのだ。全くもって」

武田が口だけで「やってらんねえ」と表現したのを、爽がジッと見ている。

暫くして、「ぼいすクン」から「や、つ、て、ら、ん、ね、え」と発声される。

非難の視線が武田に集中する。

武田「...すいません」

佐久間「気にすんな(笑)ウチが暇なのはイイ事だ。食うか？」

シュークリームを差し出す。

武田「いえ、結構です」

佐久間「じゃあさ、手伝ってくれよ。明日のメインレースなんだけどさ」

競馬雑誌を武田へ見せようとするが、一枝が素早く取り上げる。

佐久間「あ~冗談だってば、冗談(汗)一枝ちゃん、もうやらないからそれ返して」

一枝「冗談では済まされません。武田さんがギャンブルをやれば胴元が破産しかねません。引いてはARKの存在意義が疑われ、世界中の組織に迷惑が及ぶ事も・・・」

前野「まあその辺で。彼もそれはよくわかっているでしょう。単なる悪ふざけですよ」

一枝「...やはり、私が預かっておきます」

佐久間が泣きつくのを軽くあしらい、席へ戻る。

一枝は、爽をあやしなから携帯電話をイジっている。

N「なんか俺を無視して話を進められるとやな感じなんですけど...何だよ、欲しくて持ってるんじゃねえぞこんな能力、くそ」

武田はふて腐れて大あくび。

武田「ヒマっすねえ」

佐久間「ヒマなのはいいこった。それより新人、今日のメシどうする？」

武田「(冷めた目) そんなにデザート食ってて、まだ食うんすか？」

佐久間「甘いものは別腹って言うだろ」

N「意味、違うだろ」

武田「つけ麺でいいんじゃないすか」

佐久間「またか？ バリエーションつけようよ、たまにはさ。スパゲティはどうだ」

武田「どっちも麺類じゃないすか」

佐久間「バカ、ジャンルが違えば個性も違うぞ。食の道って言うのは奥が深くてな」

武田「で、何にするんすか」

佐久間「そばも捨てがたいんだよなあ。悩むなあ。新人、お前決めてくれ」

武田「つけ麺。もう変えませんよ」

佐久間「よし、じゃあお前の奢りで」

武田「普通、先輩が奢ると思うんすけど」

佐久間「心配するな、明日のメインで儲けたら、幾らでも奢ってやるよ」

武田「そんな不確定要素いらぬすから。俺、別に一人でもいいんで」

佐久間「また寂しいことを。なあ前野、飯は大勢で食った方が美味しいと思わないか」

前野は、パソコンから目を離さず眼鏡の位置を調節する。

前野「状況にもよります。基本的に味は素材でほぼ決まり、残りが調理人の腕です。

最高の調味料は空腹とも言いますが。ともあれ、私は食事をしながら会話も楽しむという器用な事が出来ないのよ」

佐久間「そういえばそういう人だったよね、お前さんは。ところで、いつになったら

お奨めの銘柄(株)を教えてくれるのよ」

前野「以前も同じ答えを返しましたが、人には向き不向きがあります」

N「激しく同意」

佐久間「おカタいね、相変わらず」

佐久間は気にした様子もなく、美味そうにわらべ餅を頬張る。

前野は、ペットボトルのサプリを飲みながら、パソコンと時計を見比べる。

一枝は爽の揺りかごを揺らしながら、伝票計算に余念がない。

石川は碁石を打ち、お茶を啜る。

N「澀んでる...よどんでるよ、ここの空気。どうにかならねえかな、このダルい空気。

石ノ森先生、現実ってこんなもんすか？一応ココってさ、超能力者を集めた、平和を守る組織じゃないんですかねえ？悪の組織、とまでは言わない。せめて能力を活かした仕事を俺にくれ」

武田は空をあおぎ、涙顔で拳を握り、そしてため息づく。

N「あああ、もうヤダ。編集部に戻りてえよお」

その時、大人しく寝返りをうっていた爽が突然、火がついたように泣き出す。

一枝が抱きかかえるのも構わず、「ばいすクン」に手を伸ばす爽。

一枝「爽くん？」

手渡した瞬間、一枝の動きが固まり、全身が総毛立つように身震いする。

N「えっ??」

武田「なんだ？」

戸惑う武田が見守る中、窓にかすかな亀裂が入る。

泣き止んだ爽は、「ぼいすクン」を猛烈な勢いで操作し、一枝はトランス状態に入って天を仰いで硬直し、佐久間は目を閉じて、歯を食い縛って震え出し、前野は左手を押さえ込み、滝のような汗を流している。

前野の腕時計の秒針と分針は、逆方向に猛回転している。

石川だけが、じつに暢気〔のんき〕にお茶をすすっている。

窓ガラスが冷気に曇り、武田の頬を微風が通り過ぎる。

ようやく異変の波が収まると、佐久間と前野は息を切らして脱力している。

一枝は、眩暈〔めまい〕に額を押さえている。

N「何だ？何だ？何なんだ？おい...」

武田は、戸惑いながらも佐久間を介抱し、前野にタオルを渡す。

ようやく落ち着いた一枝は、普段の落ち着きを取り戻して、石川に、

一枝「予知課員小田一枝、本日11時49分において、同課員である山本爽、及び佐久間大慈、及び前野哲夫、以上3名の能力発動を感知、報告いたします」

石川「はい、了承しました」

石川は真新しいファイルを開き、直通回線で支部長室を呼び出す。

一枝は、爽の「ぼいすクン」を端末につないで、勢い良く分析に取り掛かる。

N「どう、なってんの??」

戸惑うばかりの武田をよそに、佐久間は真面目顔で柔軟運動して、机の菓子を全部どけてノートを書き込む。

前野は素早く汗を拭くと、自前のパソコンにセキュリティロックをかけて閉じる。

スマートフォンを課の備付端末と接続して、複雑な操作をし始める。

武田「.....(茫然)」

全てがスピーディに進む中、石川だけはゆっくりした動きで、手際よく取り出した書類を武田へ渡す。

武田「はい？」

石川「車両部へ行って下さい。2...いや、念の為に3台、用意しておくように、と」

武田「...えっと、あ、はいッ」

戸惑いつつ受け取り、表へ駆け出す。

N「おいおいおい、何だ何だ何だ？どうなってんだ、これ??？」

必死に、走る。少し嬉しそうな顔。

能登半島・岬付近 葬儀会場

日本海を臨む景観。

無人のロビーで、礼服姿の御堂友康が一人、公衆電話を前に迷っている。

御堂「.....(意を決して)」

カードを差込み、電話をかける。呼び出し音(流行曲)が聞こえる。

御堂「.....(呼吸を整えるので必死)」

× × ×

以下、カットバック...

フォーラム会場を出たところの羽角が携帯電話に出る。

羽角「もしもし？」

御堂は声だけで喜びつつ、激しく動揺して直立不動になる。

御堂「あ、あの、御堂です。その、あ、突然、電話、ごめん」

羽角「やっぱり御堂先輩でしたか。公衆電話だったからスグわかりました。先輩の言い

付け通り、ちゃんと補聴器をお渡ししておきましたよ。やっぱり正解でしたね（笑）

そちらは、もうよろしいんですか？」

御堂「あ、うん、大丈夫。その、羽田には5時頃に着く便で、戻ります。田沢教授に、

よろしくと...あ、あの、報告会は、どう、でした？」

羽角「ええ、揃えた資料が使いやすかったと、お褒めを頂いちゃいました。やったの、

御堂先輩ですって、ちゃんと訂正しておきましたので、ご心配なく」

御堂「え？あ、そ、心配なんて、その、あれは、葉科さんが手伝ってくれたから」

羽角は口を押さえて笑っている。

御堂「え...なん、だ（笑ってくれて安心）」

羽角「後は片付けだけです。ゆっくりしてきて下さい。こっちはご心配なく」

羽角の背後、会場の方から柿本が「羽角ちゃん」と大声で呼んでいる。

電話越しに聞こえた御堂は、表情が重くなる。息苦しさに胸を押さえる。

羽角「すみません、呼ばれちゃって。じゃ、気をつけて戻って下さいね。待ってます」

御堂「あの...今の、柿本、君かな？」

羽角「はい？そうですけど」

御堂「.....あの」

羽角「？...御堂先輩」

御堂「あの、訊きたい、こと、あって...」

カードの度数切れの警告音が鳴っている。

羽角「あ、はい、何ですか」

御堂「大事な、こと、なんだけど...その、葉科さんは...か、か...（きもと）と.....」

羽角「え？...すみません、よく聞こえなくて...（呼ばれて振り返り）すぐ行きます」

羽角の後ろで、柿本が盛んに呼んでいる。

羽角「すみません、何でしたか...あれ？」

電話は、もう切れている。仕方なく電話をしまい、会場へ戻る。

× × ×

公衆電話から、度数切れカードが吐き出されている。

ため息づく御堂の背後に、喪服姿の御堂恵子が、暗い雰囲気ですり立つ。

恵子「いつまで電話してるの、友康」

御堂「？...母さん。うん、今いきます」

恵子「他の男と付き合ってる女なんか、放っておきなさい。アンタはそんな事より自分

の身体の事を気遣わないと...」

御堂「(赤面) な、何で?? 知って...」

恵子「酔っ払って自分から延々語ってたわよ、事細かに。他の男が、お前の好きな子と

付き合い始めたんだろ」

御堂「(啞然) そんな事、喋ったの？」

恵子「全く誰に似たんだか...お姉ちゃんがしっかりしてくれてなかったら、アンタちゃ

んと大学に行けたかどうか。感謝しなきゃ駄目なんだよ、本当に」

御堂「(ため息)わかってるよ」

恵子を促して、会場へ入っていく御堂。

その脳裏に、柿本の特徴ある声が蘇る。

柿本の声「俺さ、羽角と付き合ってるから」

御堂の声「はっ 葉科、さんと?.....いつ、から」

柿本の声「一応、御堂には言っとかないと、と思ってな。お前も羽角が好きだったんだろ。悪いな、ホント。でも、向こうもお前の気持ちには気付いてたらしいぞ」

御堂の声「えっ??？」

柿本の声「でもな、なってしまったものはしょうがないとして、お互い気まずくなるのも嫌だろ? だから、この話は蒸し返すなよ。あくまでも今まで通りにしてくれよな。俺もアイツも、そういう風に振舞うからさ。じゃ、頼んだぞ御堂」

御堂は沈痛な面持ちでうなだれる。

予知課内

課員に加え、加奈子と大島も参加しての会議が開かれている。

武田は隅っこ。

加奈子「それで、総合するとどうなるの？」

前野がモニターに原発を映し出す。

前野「能登原発...現在わが国最大級の原子力発電所です。システムが暴走すれば、チェルノブイリの比ではないでしょう」

大島「するのか？爆発...」

前野、佐久間、一枝らが確信をこめて頷く。息を呑む雰囲気。

N「うっそ.....マジ、ですか」

加奈子「...(冷静)今日の夜...それも早いうちだと言ったわね。今回は時間との勝負です。ところで、3人が能力を連動させたと言うのは」

一枝「充分考えられ得る現象です。やはり近距離に於いて、能力は互いに影響を受ける可能性が高いと思われます」

加奈子「面目躍如になるといいんだけど。まず、今回のこれを完璧に防いでみせないかね。さて、自然災害予知の前野さんが特定した事は」

前野「原発事故で放射能が広範囲に被害をもたらします。それによる結果が、爆発よりも遥かに恐ろしい結果をもたらすかも知れません」

石川「環境破壊よりも、ですか？」

佐久間「被害をこうむるのは西日本全体と、例の独裁専制政治をやっているお国の漁船です。南にも被害は出ますが、ただでさえ今現在対立が激化していて切羽つまっている新体制に正しい情報が伝わらず...報復と称してミサイルを」

大島「おいおい、まさか...冗談じゃねえぞ」

一枝が「ぼいすクン」を操作すると、爽を代弁する言葉が

「ぼ、た、ん、お、す」と音声を発する。

全員が重いため息をつく。

石川「あらら、それは大変ですね」

N「暢気だなア、この人は。相変わらず」

前野「あくまで、予測される範囲内で最悪のシナリオ、という事ですが」

加奈子「これは...今までになく多くの人命に関わってくるわね。システム暴走の原因で何かわかった事は？」

佐久間「それが...どうしてもそこで躓〔つまづ〕くんですよ。なぜか3人共ね」

大島「どういうことだ？」

一枝「一致する2つのキーワードです。そもそもの発端と思われるのですが、これが...一つは“自殺”。そして、“ミドウ”」

大島「自殺?...その、ミドウっていうのは人の名前か」

一枝「はい。ある特定の人物を指す言葉だと思われます」

加奈子「その2つに繋がりがあるかどうか判然としない内は、結論を出すのはまだ早い

わね。原発職員や関係者はどうです」

前野「ミドウという名に該当する者は居ません。親類縁者、開発スタッフまで広げて検索していますが、ここ3年で自殺した者も見つかっていません」

佐久間「担当から言わせてもらえば、人的災害が発端で間違いないです。ただ、自殺とシステム暴走がどう繋がるか、になると」

皆の視線が爽に集中する。

一枝「原発の専門家が、何らかの形で関わっている、としかわからないようです」

爽は、疲れたのかスヤスヤ寝入っている。

前野「しかし、専門家の中にミドウという名は無く、関連性が以前不明なままです」

加奈子「直接関係しているワケではない、と言う事なのか...（決断）ともかく、時間が惜しいので詰めましょう。前野さんは現地へ飛んで下さい。県警に協力要請を」

前野「わかりました」

自前のノートパソコンを手に、外へ向かう前野。

加奈子「佐久間さんはミドウを徹底的に当たって下さい。大島さん、同行して陣頭指揮をお願いします」

大島「しゃあねえな、と（重い腰を上げる）」

佐久間「行きますか」

大島と佐久間が、資料を手に外へ向かう。

加奈子「石川課長は私と。危機管理審議官には第二報を。安全保障室で足止めを食うかも知れないから、貴方はココに」

一枝「わかりました」

石川「あ、爽くんが目を覚ましたら、何とかもう一度がんばってもらって下さい。ただし、無理はしなくてイイからね」

加奈子と石川が、あわただしく外へ向かう。

途端、今までの緊迫感が嘘のように、静かで穏やかな部屋に戻る。

武田「.....ええっと（茫然）」

一枝は、爽の寝相〔ねぞう〕を整えてやり、事務仕事に戻る。

緊急マニュアルを広げて置いてある以外は、元に戻ってしまった。

N「あれ？俺、何すればいいの？...ねえ。ねえってば？」

手持ち無沙汰も極まり、武田はそっと一枝のデスクを覗く。

一枝「（顔も上げず）何か？」

武田「いや、あの...俺、は何したらいいのかな、と。ホラ、皆さん忙しそうだし」

一枝は、ほんの少し武田の方を見やり、

一枝「特に指示のない者は、待機です」

武田「え？...嘘でしょ、だって...だってあんな大事件が起きて...じゃなくって、これから起きるってのに、何かしないと、て言うか、させないとマズいんじゃない」

一枝「貴方の能力は発動していません」

武田「いや、それは出し方がわからないから」

外線が鳴り、応対する一枝。

取りつく島も無く、すごすごと戻る武田。

N「いいのか？ホントに何もなくていいのか？...ヤバいんじゃないの、今のこの状況

って。何でもいいから手伝わせるとかさ。ねえ？」

不満顔でだらしなく座る武田。i P O Dをイジリながら漫画雑誌を読む。

本の隙間から窺うが、一枝の様子に変化はない。

N「くそ、女傑め...イジけてやる！」

× × ×

雑誌を読み終え、欠伸と背伸び。ふと時計を見て「あっ」と声を出す。

武田「飯の事すっかり忘れてた。今から食いに行っていていいですかね？」

一枝「(一瞬、間を置いて)待機中です。外食は控えて下さい」

武田「そんな事言っただって、腹減ってさ」

一枝は喫茶店のメニューを渡す。

一枝「電話して下さい。私はクラブサンドのセットで。今回は活動中ですので、領収書で結構です」

N「(意外)おお、ココ来て初のタダ飯だ」

武田「わかりました」

少し機嫌良くなり、自分の分も合わせて出前を注文する。

電話を切り、外を見やる。

武田「...しかし、こんな時に暢気にメシ食ってていいんだ。本当に変わってるよなあ、ここって」

一枝「.....(手を休める)」

一枝は、珈琲メーカーから2人分カップに注いで、1つを武田に渡す。

武田「?.....(とっても意外)ありが、と(う)」

一枝「...貴方はいつも不満ばかりですね」

武田「え?そう、ですかね...すいません」

一枝「そんなに嫌ですか、ここが」

武田「あのね(ムツとして)ムリヤリ連れて来といていまさら何が言いたいんスか?」

一枝「能力についても、その危険性についても、このARKという組織についても十分に説明した筈です。なのに...」

武田「能力たってぜんっぜん使えねえじゃん。使い方も知らないし、役に立ってないし...俺なんて要らないじゃん。なのに何でここに居なくちゃいけないんだよ」

一枝「貴方が能力の持ち主だからです」

武田「能力のうりょく能力って...あのね、俺はこんなの要らないんだよ、要らなかったんだよ。欲しくもないし、無い方が良かったよ。そしたら編集部の仕事も続けられたし、そもそも、アンタが俺の事を見つけて無かったら今頃は...」

一枝が爽の寝顔を気遣うのを見て、つい声を荒げていた事に気付く。

武田「(ため息づく)すいません」

一枝「...持って生まれた者しか、その苦しみはわからないかも知れない。でも、能力を使いこなせれば、他の人では出来ない事が出来るようになる。その分、責任も重い」

武田「.....」

一枝「昔、支部長に言われた言葉です。貴方は、どうやったら能力を使えるのか、わからないし、知ろうともしていない。試行錯誤して、その方法を会得して、人の役に立てようとは思わないですか?」

武田「...さぁね（ふて腐れる）」

一枝「人の為に何かすることが無ければ、誰からも必要とされなくなる。自分の事ばかり考えている人は、本当に助けて欲しい時、見返りが無いからと、誰からも助けてもらえない。そんな恐怖を感じた事はありませんか？」

武田「.....（気まずくなり、考え込む）」

一枝「私も、偉そうな事を言えた人間じゃありません。けど、私はいつも、そんな怖さを感じるんです。だから...」

視線を逸らし、カップを片付けに流しへ行く一枝。

武田は、ただ茫然。

N「結構しゃべるんだな、この人...ソナム、説教されてしまった。さすが女傑」

突然、火がついたように泣き叫ぶ爽。

一枝がミルクを与えようとするが、爽が必死に伸ばした手に弾かれてこぼれる。

武田「あ、俺、拭きます」

一枝が流しへ行き、武田がフキンで爽の襟元〔えりもと〕を拭いてやる。

その時、爽が武田へ手を伸ばし、胸倉をつかまれるような格好になる。

おでこがぶつかる。瞬間、武田の脳裏にイメージが浮かぶ。

いくつかの数字。その色々な形...

一枝「！ッ・・・（感知能力が発動する）」

硬直していた一枝が慌てて戻ると、武田は爽を抱いたまま、あおむけに倒れる。

一枝「爽くん？...武田さん！」

まず爽を大事に抱え、それから武田を支え起こす。

朦朧とした武田の目は、焦点が定まっていない。

武田「.....（止まっていた呼吸が快復する）おわぁッ！」

溺れていたかのように、荒い息をついて覚醒する武田。

そこで、一枝が心配そうに覗き込んでいたことに気付いて、更に驚く。

N「うわ、びっくりしたァ.....コイツ、こんな顔も、するんだ」

一枝「今、浮かびましたか？」

武田「え？何？」

一枝「（厳しく）能力です、貴方の。発動したでしょう。何が見えたんです？」

武田「あ！そうだ、そうだった。見えた」

慌てて起き上がり、ノートに書き込み始める武田。

爽が「ばいすくん」に手を伸ばす。

一枝が取ってやると、爽が入力し始める。

ばいすくん「み、ど、う、と、も、や、す」

一枝「ミドウ...トモヤス。名前...この人がそうなの？」

ばいすくん「ひ、ん、と、は、す、う、じ」

一枝「数字？...武田さんの見た数字が、ミドウを追う、手掛かり」

爽は嬉しそうに笑っている。

武田は、ブツブツ呟きつつ、懸命に思い出しながら数字を書いている。

一枝は、あきれつつも微笑を浮かべて踵〔きびす〕を返し、課長と支部長への直通ラインに通信を入れる。

一枝「予知課員小田一枝、本日14時59分において、同課員である山本爽、及び武田頼義、以上2名の能力発動を感知、報告致します」
石川（声）「はい、了承しました」

能登・御堂家

帰京支度をしている御堂。私服だ。

茫然としていて、部屋に恵子が入ってきた事にも気付かない。

恵子「準備できた？またボートとして」

御堂「？...あ、えっと、何？」

恵子「間に合うの？飛行機の時間」

御堂「ウン（時計を見る）3時に出れば。姉さんは、まだコッチに居るの？」

恵子「らしいね。助かるよ、いつもあの子には。アンタが帰るほども無かったんだけど一応お父さんの7回忌だしね」

御堂「コレ、玄関に置いて来るから」

リュックを背に立ち上がる。

恵子「友康。アンタは普通の身体じゃないんだからね。世の中の、下らない連中と同じようにする事は全然ないんだよ」

御堂「下らない？って、なに」

恵子「惚れたのはれたのって、そんなの就職してからいくらでも出来るんだよ。父さんの分も、アンタにはホントに期待してるんだからね」

御堂「...（胸を軽く押さえる）はい」

恵子は、夫の遺影を眺めるばかり。

御堂「あの、さ。もし、嫌な予感が、次から次に的中しちゃったら、どうする？」

恵子「（キョトン、と）何を言ってるの」

御堂「何でもない。ごめん」

玄関へ行く。

恵子は首を傾〔かし〕げている。

予知課内～他、各課員

会議用スピーカーフォンとして、佐久間と大島、加奈子と石川、前野たちと同時に話せるようにしてある。

机上には、能登原発付近の地図と共に、数字を書き出したメモが散らばる。

武田「繰り返します。順に、1500、249、750、680、1618033...

これだけは、まだ先に続く感じでした。で、299792458、22、929。

次が空白の横に4。最後が39312020。以上です」

加奈子（声）「よくわからないけど、その順序で間違いないの？」

一枝「はい。爽くんはヒントだと言ってますから、見た順番も関係があるかと」

× × ×

警察署内・情報処理室で、大島と佐久間が考え込んでいる。

大掛かりな端末が所狭しと並ぶ中、大島は傍らの部下に指示を出す。

佐久間「まあ、フルネームわかっただけでも大進歩でしょう。今データベースを当たっ

てるが、国民総背番号制とか言ってもまだまだ、役に立たねえな。当たりのついた所から人員を差し向けてるんだが、今のところ成果なし」

大島「おい、数字を全部調べさせた。関連性は見当たらないし、個々の意味はそれぞれ何十通りもある。だが、長いヤツに関しちゃ、高い確率でわかった」

一枝「5番目と6番目ですね」

大島「最初のは黄金比と一致する。正確には1点618033てな具合に、このあと延々と続く。次のはほぼ間違いなく、光の秒速だそうだ。メートル法の基礎になってる」

× × ×

顔を見合わせる武田と一枝。

武田「原発と黄金比って、何か関係あるの」

一枝「さあ...研究に関係しているのか、それともそれを学ぶ学生とか、そういったものまで含めるとなると」

× × ×

難しい顔つきの加奈子と石川。

石川「それこそ絞り切れませんねえ。困った困った。前野君、何か気付かないかい？」

× × ×

能登原発・施設内の前野。

前野「情報が少な過ぎますので、何とも。こちらでも、“ミドウ”に合致する物や人物に該当ありません。ともかく、データベースを徹底して洗うしかなさそうです」

以下、カットバック...

加奈子は、会議室内に資料を配るよう部下に指示を出し、数字を見つめる。

加奈子「こちらでも専門家に訊ねているところです。幸いここには日立とGE関係者を始め、原発の第一人者がほぼ揃いました。でも一人、所在不明なの。大島さんの方でも探してもらえますか」

大島「誰です？」

石川「EPCの副委員長で、W大の田沢教授です。携帯嫌いな人物だそうで、連絡がつきません。この田沢教授が、能登原発の新型システムの開発における、最大の功労者だそうです」

前野は、原発職員らに数字のメモを手渡し、スマートフォンのデータを見る。

前野「こちらでも田沢教授の名前が挙がっています。どうも、彼に聞くのが一番の早道のようなですね」

佐久間「そっちのシステムはどうなんだ？大丈夫なのか」

前野「専門の方々からお聞き及びでしょうが、システムの安全面で、現段階で危険視される問題は見当たりません。となれば、開発に携わり、最もシステムを熟知した人物に直接訊くのが最善です」

加奈子「そうね。それはこっちと大島さんで最優先とします。後は、何とかミドウトモヤスを特定しないとイケない、か。数字で何かわかった事は他にない？」

武田は真剣に考え込んでいる。難しい表情だが、どこか興奮したような生き活きとした表情だ。

一枝「武田さん？」

武田「...え？なに」

一枝「何か、気になる事でも？」

武田「大した事じゃないんだけど。数字の見え方、って言うのかな？それが、それぞれ
少しずつ違ってたような...」

佐久間「どういう意味だ」

武田「文字にも色んな形があるじゃないですか。馬券の時は3つがただ頭に浮かんで見え
ただけだったけど、今回は...例えば」

ノートに書き込んでいく。

武田「最初のはデジタル表示っぽかった。次の2つはゴシック文字みたいで、標識とか
の文字に見えたし、680は手書きの汚い字で、長い2つは暗記したものを頭に思い
浮かべた感じで。ああ、22と929もそれと同じ。4は、光ってたような...」

一枝「最後の数字は」

武田「ぼやけてよくわからない。でも、固い壁とかに彫ったような歪な感じに見えた」

佐久間「ほお。それで、何がわかるんだ」

武田「いえ、まだ何も」

全体に、少しガッカリしたムードが漂う。

ふと、地図を見つめていた一枝が目を瞠〔みは〕り、顔を机に近づける。手招き。

武田「?...」

一枝「これ（指差す）」

地図上、半島を走る国道249号線が空港につながっている、と指し示す。

一枝「それぞれの数字が、そこにあるものをそのまま見た光景だとしたら？」

武田「...そうか！（気付く）例えば...時計」

一枝「道路標識。空港の発着便案内」

武田は地図に書き込んでみる。

1500を時刻の15時として、家を出て国道249号線で空港へ向かう、と矢印
を書き、空港の位置に750と上書きする。

武田が顔を上げると、一枝が会心の笑みを浮かべて見つめ返している。

一枝「前野さん、職員の方なら詳しいと思います、能登空港の発着便で750に関連し
たものがあるか聞いて下さい」

前野「ちょっと待って下さい.....ええ、あります。ANA750便。能登発15時45
分で、羽田着が16時50分予定です」

イメージ映像（挿入）...腕時計を見る御堂。15時の表示。

運転する御堂。道路標識の249。

空港で離着陸案内板を見上げる御堂。750便を確認してゲートへ向かう。

加奈子「県警から航空会社に、その便の乗客を問い合わせてもらって下さい。ミドウ
トモヤスという名前があるかどうか」

前野「はい」

あわただしくなる中、武田は首を傾げる。

武田「て事は...この数字って」

一枝「ミドウ本人が眼にした物、もしくは鮮明に思い浮かべた物、という可能性が高い
んじゃない?...（咳払い）と、思われます」

前野「ありました！乗客名簿に、御堂友康」

佐久間「でかした、武田！」

喜びムードもつかの間、加奈子の厳しい声が響く。

加奈子「もう羽田に着いてから時間が経過しています。大島さん、所轄に連絡を」

石川「前野君は引き続き原発を。佐久間君は御堂について情報を集めて下さい。我々は

田沢教授にお会いしようと思います」

一枝「...（考える）課長、武田さんを現地に行かせて、数字を順序どおりに迎らせる、
というのはどうでしょう」

石川「そうですね。じゃあ武田君、よろしく」

武田「え？俺が、行くの？」

一枝「下に服部君が待機してます、急いで」

N「げ...忍者かよ」

一枝は、渋い顔をする武田に資料の束を突きつけて渡す。厳しい目つき。

一枝「早くッ」

武田は、逃げるように外へ向かう。

一枝「...（ほんのかすかな笑み）」

都内（W大学院近隣）御堂宅アパート（夕）

帰宅して荷物を片付ける御堂。一息ついて部屋を見渡す。

狭くて物は少なめだが、こざっぱりと住み心地良さげな空間。

机上に飾られたゼミ仲間の集合写真。御堂と羽角が隣に並んでいる。

御堂「.....（写真を見つめる）」

取り外した写真を手に、名残惜しそうに見つめてから、ゴミ箱へ捨てようとする、
が捨てられない。

ため息と共に、懐へ大事そうにしまうと、そこから封書を取り出して机上へ置く。

御堂「.....（思い詰めた目）」

迷った拳句に、封書は抽斗〔ひきだし〕の中に入れる。

外へ出て行きかけて、思い出したように電話線のコードを抜こうとした、ところへ
電話が鳴る。

御堂「はい？」

羽角（声）「あ、良かった。御堂先輩、お帰りだったんですね。葉科です」

御堂「あ、え、えと、その...どうも」

羽角（声）「あの、先輩、安全保障だか危機管理室って、知ってます？」

御堂「え？何...なんの事」

羽角（声）「何だか、そういう所から迎えが来て、田沢教授が呼ばれてっちゃったんで
すけど。何だか凄く緊急なんだとか」

御堂「...さあ、聞いてないけど」

羽角（声）「あ、それと、何かあれば研究室に連絡するからって教授が。先輩も来られ
ますか？」

御堂「え？あ、うん...その、葉科さんは」

羽角（声）「もちろん、私も。ゼミの皆は先に行っちゃったので、いま一人で向かって

ます」

御堂「はい……あ、あの、さっきの、電話、なんだけど」

羽角（声）「そう言えばさっき切れちゃいましたけど、何かお話あったんですか」

御堂「…うん、その、（言いよどむ）」

羽角（声）「あ、電車が来ちゃったので、また。それじゃあ、後で」

御堂「あ、はい……（通話は切れている）」

深くゆっくりため息づき、受話器を置いてモジュラーを引き抜く。

また部屋を振り返って見つめ、部屋を出る。

ラーメン店「豚太〔トンた〕」（夕）

表の看板には大きく『こだわり！とんこつ 680円』と手書きされている。

客は御堂だけ。渡辺がギョーザを出す。

御堂「え？あの」

渡辺「サービス。新メニューだ、食ってみ」

御堂「ありがとうございます」

猫舌な御堂は、息を吹き吹きギョーザを食べて喜ぶ。

御堂「美味しいです」

渡辺「おい。何かお前、いつにも増して暗いな。何かあったのか」

御堂「…別に、何も。父の法要帰りだから、ですかね」

ギョーザを食べる御堂。しんみりと。

渡辺「やっぱり、何かあったろ」

御堂「え？」

渡辺「フラれた、とか」

いきなり噎〔む〕せる御堂。水を飲む。

渡辺「あ～あ、凶星かよ。しょうがねえな、ったく…ほれ、大盛サービス」

ラーメンを出され、苦しみながら受け取る御堂。やっと落ち着く。

渡辺「ニンニクもたっぷり入れる。まあ、あれだ、なあ？美味しいモン食える内は大丈夫だ。生きてるって事だからな、それが」

御堂「…はい（弱々しい笑い）いただきます」

黙々と食べる御堂を、渡辺が心配そうに見ている。

回転灯を点けて、狭い裏道、商店街などを快走するクーペフィアット（夕）

同・車内～他、各課員（夕）

運転する服部と、助手席で車酔いに苦しむ武田。

やたらとテンションが高い服部を見やり、

N「忍者ハットリくん。ARK車両部の張り切りカーキチ小僧…（込み上げる）腕は確かだが、どうにも荒っぽい。色々イジってある自分の車を、こういう時には緊急車両として使っていいことになってる。お陰でコイツはいつも無茶しやがる…オエ」
車は人込みの中を縫うように、縦横無尽に駆け抜ける。

服部の雄叫びが轟く。

服部「いやあ、気分最高。あれ？武田さんまた酔ったんですか、弱いなもう」

武田「横揺れさせずに走ってくれ…」

窓を全開にしてグッタリする。

服部「何言ってるんすか、急ぐんっしょ？俺よくわかんねえけど。まだ飛ばしますよ」

車載電話が鳴る。武田がハンズフリーで応答する。一枝からだ。

× × ×

一枝は爽を抱いたまま、課全体に中継と指示を行う。

一枝「御堂友康の詳細が判明。23歳、W大学院生で、院からは田沢ゼミに所属、実家が能登です。研究テーマは次世代エネルギー。各自、送信情報及び添付資料で顔と履歴を確認の事。尚、対象はペースメーカー使用の為、携帯電話を始め、モバイル類を一切所持した事が無い。よって、GPSによる位置特定は不可能」

× × ×

能登原発。前野が、印刷された御堂の資料を受け取る。

前野「実家はすぐ近くです。私も出ます」

一枝（声）「了解。佐久間班は広域捜査を」

× × ×

警察署を出る佐久間と大島。通信装備搭載の4輪駆動パトカーへ乗り込む。

佐久間「手配は済ませた。念の為、指揮車両を出す。そっちに情報を送ってくれ」

× × ×

某会議室。官僚たちが居並ぶ中、連れてこられて戸惑っている田沢。

田沢「御堂君が？なぜ自殺など…」

加奈子「理由にお心当たりは」

田沢「ある筈がない。ゼミで最も信頼の置ける、近頃には珍しい向学心溢れる若者だよ彼は。私も探しに行かねば」

逸〔はや〕る田沢を、石川がなだめる。

石川「その為にも、システムについてお教え頂けますか？田沢教授が頼りなのです」

加奈子「（通信に）状況はどう？」

× × ×

車載プリンターから吐き出される資料。

武田「学生か…やっぱり大学か自宅じゃないかな。黄金比とかの数字を思い浮かべたって事は、テストとか課題とか」

一枝「そうですね。では、お願いします」

武田「え？お願いって…おわッ？！」

服部は、狭い路地でスピン+ターンを決めて、逆方向へアクセルを踏み込む。

一枝「服部さん、今回は手加減抜きで構いません、現着〔現場到着〕一番乗りで。多少でしたらどんな手を使っても、コチラで揉み消します」

N「揉み消すなァ！」

服部「（喜）了解しましたァ！」

軽快にハンドルを切る服部。

車は、急角度の極細路地に突っ込んだかと思うと、工事現場へ突っ込んで行く。

服部の雄叫びと、武田の泣きそうな悲鳴、現場作業員たちの右往左往ぶり、クラク

ションと砂煙がM I Xされる。

W大学キャンパス内（夕闇）

トボトボと歩いてくる御堂。

柿本が、目敏〔めざと〕く御堂を見つけて駆け寄ってくる。

柿本「御堂、もう戻ったの？早かったな」

御堂「あ、うん...まあ」

柿本「丁度良かった、ちょっと聞きたい事があったんだ」

書きかけのレポート用紙を取り出す。

柿本「黄金比って幾つだっけ」

御堂「?...えっと、確か1、618033」

柿本「(メモする) ああわかった。じゃ、光の速度は覚えてるか」

御堂「えっと...299792458m/s」

柿本「ん。サンキュ、助かった。ゼミ面談で新入に使おうと思ってさ。俺うる覚えだったからな、お前が居て助かるよ」

御堂「...そう」

柿本「しかし携帯持ってないと不便だよなあ、そんなにダメなの？」

御堂「いや、確か、22よりも離して使えば、ペースメーカーに影響ない筈だよ。最近のは特に、PHSなんかだと、もっと大丈夫って聞いているし」

柿本「何だ、じゃ持てばいいじゃないか。連絡取れないと、何かと困るだろ」

御堂「いいんだ。無い方が日常生活に支障はないって言われてるし。それに、もう...」

柿本「ん？」

御堂「いや、何でも...あ、あの」

柿本は、建物に入っていく羽角の姿を見つける。

御堂も羽角も互いに気付いていないと判断して、御堂の肩を抱いて、羽角の居る方から御堂の目を逸らせる。

柿本「しかし参ったよな、教授にも。何か急に呼ばれて行っちゃったけど、いつ戻ってくるやら。で、なに、お前は教授に呼ばれたのか」

御堂「あ、いや...葉科、さんに、聞いて」

柿本は、御堂に見えないように狡猾な笑みを浮かべる。

柿本「羽角から聞いた、か。ま、しょうがないな、お前は教授の信頼が厚いから。でも勘違いするなよ。羽角が普段通りに話してるのは、お前と気まずくならない為の配慮なんだから」

御堂「あ、うん。僕は、ただ...」

柿本「アイツも言ってたよ、何かお前に悪い気がするって。でも仕方ないだろ？こういう事はさ。今そうやって言い聞かせてるところだから、くれぐれも、話を蒸し返すなよ。いいな？」

御堂「.....そう、だね。うん」

柿本「わかってくれりゃいいんだ。お前はいい奴だもんな。アイツもそう言ってる... っとそうだ、研究室で待ってるんだったなアイツ。ワリィ、先行くぞ。じゃあな」
一方的に突き放して駆け去って行く。

御堂「……（落ち込む）」

トボトボと歩き出す。

同・研究室前（夕闇）

扉の前に来て、中から愉しそうな笑い声が聞こえてくるのに気付く御堂。

半開きの扉から中をそっと窺うと、柿本と羽角が談笑している。

御堂「……（胸が、苦しい）」

角度的に、丁度2人は身体を寄せ合って、イチャついているようにも見える。

更に柿本は、羽角の顔に手を伸ばし、黙り込んだ羽角に顔を近づけていく。

御堂「…ッ」

それ以上見てもらえない御堂は、その場を去る。エレベーターの方へ行く。

同・研究室内（夕闇）

羽角の顔にほんの少し触れる柿本。

柿本「はい、ゴミとれたよ」

羽角「ありがとうございます。あの、今、誰かそこに居ませんでしたか？」

柿本「ン？さあ、気付かなかったけど」

羽角「そうですか。で、柿本先輩。お話って結局、何だったんです？」

柿本「そうそう、ディズニー・シーか富士急、どっちがいいか決めて欲しかったんだ。

俺の奢りだから、心配は要らないよ」

羽角「前にも言いましたけど、私はゼミとバイトで忙しいので無理です。そういうのは恋人と行ってらして下さい」

柿本「そんなのいないよ、だから誘ってんじゃん」

羽角「はいはい（適当にあしらう）それにしても、御堂先輩、遅いですね。私、ちょっと表を探しに行ってきます」

柿本は、部屋を出る羽角を見送り、してやったりの笑みを浮かべている。

柿本「まだまだガード固いな。まあ、じっくりやればいいか。邪魔なのは消えたし」

御堂宅アパート（夕闇）

服部と初老の警官が、大家から預かった鍵でドアを開ける。中を覗く。

警官「いやまあ綺麗なもんだ。すぐにでも引越が出来そうだね」

服部「おじゃましま～す」

遠慮なく一通り部屋を見渡し、机の抽斗を開ける。封書を見つける。

封書の表書きには「遺書」とある。

服部「ゲッツ…」

同・表～商店街（夕闇）

武田は、クーペの助手席で車酔いにグッタリとしている。

N「くそ、動けねえ……（こみ上げる）オエ 気持ち悪ィ」

携帯電話を操作しようとするが、バッテリー切れの警告の直後、画面が消える。

武田「おいおい、こんな時に…？」

ふと見やった先、奥まった通りに見えた看板…680円…に目を止める。

N「ん？あれって…」

車を降りて、店へ近づく武田。

服部が警官と一緒に駆けてくる。

服部「おい、ヤバいぞ、これ、これ」

遺書を見せるが、武田は看板を目掛けて走り出す。追いかける服部。

服部「おいってば、これ、これ見ろよ」

武田「これだ！この汚い字、間違いない」

服部「は？あの数字の事か。あ、おい、ボヤッキー！」

武田は「豚太」に入って店内を見渡し、不審顔の渡辺に写真を見せながら、

武田「この人が来たでしょ？いつ来た？いつ出てった？どっちへ行った？」

渡辺「え？何言ってるんだ、アンタ」

武田「ドコへ行った？」

武田の異様な気迫に押されて、渡辺は大学方向を指差す。

服部「あっちは、大学か？」

武田「御堂は大学の方へ行ったんですか」

渡辺「ああ、多分」

武田&服部「（お辞儀）ご協力ありがとうございます」

走り去っていく2人（行くぞボヤッキー、誰がボヤッキーだ、等と掛け合いしながら）を、警官と渡辺が茫然と見送り、立ち尽くす。

渡辺「何だったんだ、ありゃ」

警官「何でもな、お上の重要な仕事を任されてるチームなんだと。上から全面的に協力しろ、ってお達しがあったね」

渡辺「へえ…あんなのが？」

警官「そう、あんなのが」

渡辺「世の中、大分変わったんだな」

警官「そうでもないさ」

渡辺が見ると、警官は勝手にギョーザを食べている。

某・会議室（夕闇）

田沢を聴取する石川と加奈子。

彼らを囲んで、安全保障室の官僚たちが不安そうに様子を見守っている。

田沢「今までのやり方ではいかなのだ。もうプルサーマルは限界が近い。だからこそ、

MOX加工の全てを国内で賄〔まかな〕い、かつ放射性廃棄物を限りなく減らす為、ATRを超える新しい方法を模索し、試作を経て完成型へとこぎつけたのです。それが能登のシステムですよ」

石川「大変興味深く拝聴しております。出来るなら、このままお伺いしたいのは山々なのですが、時間がさし迫っています。どうか可能性を検討して頂けませんか」
暫し考え込む田沢。静まり返る。

田沢「...あり得ませんな」

一斉にため息が漏れ、全体が落胆ムード。

田沢「バックアップまで私が直接管理しているのです。システム異常による暴走などと馬鹿げている。大体、それが御堂君とどう関わってくるというのです」

石川「現在、部下が懸命に捜索中です」

加奈子「能力については、先程ご説明した通りです。今は信じて頂く他ありません」

田沢「そんな空想科学的な事を軽々しく言われても困るよ。私は俗物なのでね。それより、私も彼を探しに行かなくては」

勝手に出て行こうとする田沢を、スタッフたちが止めている。押し問答。

焦燥顔を見合わせる石川と加奈子。

W大学キャンパス内（夕闇）

御堂を探して正門付近を見やる羽角。

外から駆けて来る武田と服部を見て、何だろう？と首を傾げる。

武田「...（左右を見回して）ん？」

9イコール9、という字が目に入ってくる。

それは羽角が着ている上着に、花柄と共にデザインプリントされたものだ。

服部「くそ、広いな結構。どうする、ボヤッキ...？」

武田「あの子」

服部「おお、女子大生 カワイイ」

武田「（服部を小突き）服のガラを見る」

服部「9 = 9...」

羽角は、怪しい2人にジッと見つめられて気味が悪くなり、足早に去ろうとする。

が、行く手に先回りされる。

武田「すみません。ちょっといいかな」

羽角「（軽く警戒）何でしょうか？」

武田「その字だけど、もしかしてそのイコール、漢数字の2〔二〕の事じゃないかな？
で、本当の意味は、9 2 9。誕生日か何かの」

羽角「?...あの、何を」

服部「そうか、これ誕生花だ。クジャクアスター、9月29日。花言葉は確か、可憐」

武田「詳しいな、お前」

服部「（自慢）実家が花屋です」

羽角「あの、貴方たちは」

武田「えっとですね、説明しづらいんだけど」

服部「どう？当たってた？」

武田「ちょっと黙ってろって」

羽角「ええ、まあ」

武田は、喜ぶ服部を脇へどけて、

武田「じゃあ、御堂友康って人を知ってる？ここでその人に会わなかった？」

羽角「あの？...御堂先輩が、どうかしたんですか？」

武田&服部「知り合い？」

男2人に肉薄〔にくはく〕されて、おびえる羽角。

某・会議室（夕闇）

膠着状態。それぞれが思い思いの方向を向いて考え込んでいる。ふと、

石川「あの」

田沢「?...はい」

石川「先程、バックアップも直接あなたがやっている、といったような事をおっしゃいませんでしたか」

田沢「ええ。その通りです」

加奈子「ここから、という事ですか？能登にある原発のシステムを、どうやって」

田沢「それは、大学の地下に御堂君と2人で組み上げた端末があるのです。見た目は大した事はないが、あれの性能は素晴らしい。正しく御堂君のセンスが.....」

固まる。皆が田沢に注目する。

田沢「そういえば、そう、リンクしている...緊急用の、遠隔操作...もしあれが止まったら...いや、そんな事が起こる筈が...しかし、もし自家発電装置と電源が同時に...」

石川「確か、御堂友康はペースメーカー使用者。とすると、彼は電気ショックでペースメーカーを止める気では？その際、バックアップ用電源がシステムごと落ちて...」

加奈子「そうなる...田沢教授？そうなった場合、暴走は、起こり得るのですか」

田沢「...（半ば茫然と、頷く）可能性は」

加奈子「ドコです？場所を、詳しく」

大学の見取り図を田沢に見せる。

室内は、静寂から一転して、蜂の巣を突付いたような騒ぎだ。

石川は、珍しく焦りがちに一枝へと通信を入れる。

W大学キャンパス内（夕闇）

羽角「自殺！？御堂先輩が？：そんな、どういう事なんですか、どうして！」

今度は逆に、羽角が武田たちに肉薄している。武田たちは迫力にタジタジ。

武田「いや、理由までは俺らにも...なあ」

服部「あ、うん、そうそう。数字を辿ってここまで来ただけ、なんです」

羽角「大変、先輩を探さないと」

武田「そうだ、こういうの、見覚えはない？」

資料に4を書き込む。見た通りの形を再現し、左横にぼやけた四角を描く。

武田「こんなの、どこかで」

羽角「さあ...ここに、先輩が？」

武田「どこかの表示だと思う。左がわからないんだ。よく、思い出してみて」

羽角「...もしかしたら。変電室」

武田「変電室？」

羽角「研究室の地下に非常用の自家発電装置があって、教授と御堂先輩はそこで原発のシステムをバックアップ出来るように、プログラミングを...まさか」

武田「そこは、地下の何階にあるの？」

羽角「4階... B、4...エレベーターの表示です、きっと、これ」

武田「案内して！早く」

武田は、羽角を促して走り出す。服部も、戸惑いつつ追いかける。

そこへ通りがかった柿本が、羽角たちを見かけてコソコソと後を追ってくる。

都内を走る指揮車両・車内（夕闇）

一枝から報告を受ける佐久間と大島。

佐久間「キャンパスの？...研究室地下...4階に...はい、了解、急行します」

大島「(部下に)念の為、救命班も呼んでおけ。急がせろ、最優先でやれ」

返事を待たず緊急サイレンを鳴らす。

予知課内（夕闇）

一枝が共有プログラムからダウンロードした添付資料を開いて、同じ画面を開いている前野に説明している。

一枝「システムのリンクを遮断する事は出来ませんか？」

前野（声）「大元のシステムが不具合を起こしかねません。勿論、最終手段としてはアリですが、お勧めはできないそうです。御堂の方はどうなってますか？」

一枝「まだです...武田さんと連絡が取れなくて。こんな時に、あの人は」

× × ×

発電所内の高熱で汗だくの前野。

前野「もしかしたら、彼がやってくれるかも知れませんよ」

一枝「...(複雑)ともかく、切り替えを急いでもらって下さい。でき次第そちらで」

前野「(達観)信じましょう。それしか、できないんだし」

一枝「...はい」

通信を切って、爽を見やる。爽は寝息を立てている。

一枝は窓外を見つめて、祈る。

研究室地下4階・変電室

入口に「B4」表示が点灯している。

御堂はシステムを点検している。一瞬だが、その脳裏に自分の感電死する死に様が鮮明に浮かぶ。

御堂「...またか。やっぱり、全部当たっちゃうんだな」

自嘲気味に笑い、システムに電源を供給しているプラグの配電を見やる。

辿っていくと、自家発電装置がある。

御堂「そうか、あれなら...システムに影響しないようにすれば、簡単に...楽に...」

胸を押さえて、深呼吸する。そこに写真を入れた事を思い出し、取り出す。

羽角の笑顔を指でなぞる。

御堂「... (思わず泣きそうになる)」

振り切るように写真をしまい、肺に空気を思い切り詰め込む御堂。

息を止めて、装置を見据える。

近づく。一步、一步と。

同・地上1階(夕闇)

エレベーター前。ボタンを押しても何も動かず、表示が変化しない。

立ち往生する羽角、武田、服部たち。

武田「地下で止まってる...誰かが電源を」

羽角「先輩が... (血の気が引いている)」

服部「階段はどっち？」

真っ先に羽角が飛び出し、武田たちが後を追う。

柿本も、様子を窺いつつコソコソと後を追う。

同・変電室

御堂は装置の裏手に回り込み、カバーを壊して電極を剥き出しにする。

御堂「...もう、いいや。なんか疲れたし。少しは、悲しんでくれるのかな」

ため息つき、いざ電極へ手を伸ばしてみるが、そこでためらう。

御堂「...そう、か。ここで何も起こらなかつたら、外れた。初めて、ハズレが」

戸惑いつつ、徐々に手を離していくところへ、数人の足音が近づいてくる。

御堂「?... (扉の方へ歩いていきかける)」

その時、上着の端が機械の出っ張りに引っ掛かり、バランスを崩して転びそうになって、慌てて手を突く。電極に触れる。

バチッと派手な火花が飛び散って、その場に倒れる御堂。

そこへ、ドアを開けて羽角たちが入ってくる。

羽角「先輩！御堂先輩！.....ッ」

倒れている御堂を見つけ、駆け寄る。

羽角「先輩？先輩、起きて！」

目を開ける御堂。息苦しく胸を押さえる。

地下室の照明が明滅する中、走ってきて息を切らせた武田と服部。

システム異常を知らせる警告音に慌てつつ、端末を探す。

御堂をムリヤリ起こす武田。

武田「おい、御堂？御堂、アラームが鳴ってるけど、どうしたらいい？」

羽角「やめて下さい、先輩が...」

武田「原発が暴走するかも知れないんだ、洒落じゃ済まないんだよ！」

御堂「サブの方の、発電システムを」

弱々しい御堂を羽角が支え、端末まで連れて行く。

様子を覗き見ている柿本は、物々しい雰囲気なので入っていけない。

御堂「自家発電は、死んでないから...これを再起動すれば、多分」

武田「大丈夫なのか？」

御堂「今、やってみます」

皆が息を呑む間、御堂は胸を押さえつつシステム・リブートを行う。

能登原発（夜）

アラームが何重にも轟いている。

前野は職員たちを激励しつつ、システム切り離しを進めている。汗だくだ。

某・会議室（夜）

全員の視線が、原発の様子が映し出されたモニターに集まっている。

予知課内（夜）

爽を抱いた一枝も、同じ画面を見つめている。張り詰めた表情で、祈る。

研究室地下4階・変電室～他、各課員

御堂は朦朧としながらも、何とかリブートを終える。

途端、照明が正常に戻り、端末が「システム復旧」を告げる。

武田「え?...うまく、いったの??」

服部「いったんじゃ、ねえか」

叫び、喜び抱き合う武田と服部。

羽角も安心して御堂を見る。

羽角「先輩?...せん、ぱ」

御堂「.....（胸を押さえたまま倒れる）」

羽角「先輩！先輩！」

× × ×

カットバック...原発内。

警報が止み、システム画面は復旧を知らせる「ノーマルモード」表示に変わり、バックアップを要求している。

皆の歓喜の最中、前野が報告を入れる。

× × ×

某会議室。報告を受ける加奈子。

加奈子「システム復旧。予備との切り離しも完了。危機は脱しました」

こちらも一斉に歓喜が上がる。

審議官は早速「総理へ報告を」と外へ向かい、他の官僚たちもそれに続く。

田沢も石川も、大きく息をついて胸を撫で下ろす。加奈子も同じく。

予知課内。爽を高く掲げて喜ぶ一枝。

泣き出す爽をあやしつける。

× × ×

変電室内。茫然としている柿本を押し退けて、佐久間や大島たちが駆けつける。

室内は重苦しい雰囲気。

羽角が必死になって御堂に呼びかけるが、御堂には全く反応がない。

佐久間「武田、どうした？」

武田「原発は助かったんですけど、御堂が…」

羽角「先輩！先輩！先輩！」

大島が御堂の身体を診る。

大島「心停止状態だ…（部下に）119番！救命班はまだか？急げ！」

佐久間「服部、ここの医務担当が居ないか探して来てくれ」

服部「はいッ（ダッシュで階段へ）」

羽角は大島を押し退けて、人工呼吸と心臓マッサージを始める。

武田「やり方、知ってるの？」

羽角「スポーツインストラクターのバイトをした時に、救命訓練は一通り。実際にやるのは、今日が、初めてです」

懸命に救命措置を繰り返す。物凄い気迫に、声をかけるのもためられる。

× × ×

田沢はふと、机上の資料に目を止める。

田沢「これは？」

石川「はい？ああ、御堂友康に関連した数字を書き出したものです。ウチの課員が予知しました。それが、何か」

田沢「…ふむ。どうやら能力、というのは本物のようですね」

石川「と言いますと」

田沢「この最後の数字。これは、私と御堂君の生年月日の和でしてね。1948の1111と、1983の0909。システムの完成を記念して、変電室の天井に刻んだのです。こう、脚立に登ってね」

メモに上書きする。確かに2つを足したものが、武田の予知した数字と一致する。

加奈子「最後の、数字…？」

石川「…まだ、終わってない？」

× × ×

羽角の救命措置が続いているが、御堂に変化はない。

武田は沈痛な面持ちで目を背ける。

佐久間の携帯電話が鳴る。廊下側へ行って電話に出ると、すぐ武田を呼ぶ。

武田「はい」

佐久間「課長だ（渡す）」

武田「はい…はい、その、心停止して…え？…いえ、まだ。そう言えば、最後の数字だけ、まだわかってなくて…え？天井…」

天井を見上げる。目を凝らす。

あった。硬い先端で刻んだ数字。39312020。

丁度、御堂の顔の真上に位置している。

武田「…御堂が、一番最後に見た数字」

羽角は人工呼吸し、心臓マッサージを続けているが、疲れと涙で顔がクシャクシャになっている。

大島「…（外に）くそ、まだ来ないのか？」

武田は大島を押し退けて、御堂に話しかける。

武田「おい、お前あれ見たのか？あの数字を見たか見てないか、どっちなんだ？」

羽角「やめて、邪魔しないで！」

武田「(天井を指差して)最後の数字だ、あれが。でも、もう見ていたのかどうかはわからない。もしかしたら...」

思いついて、御堂の目をムリヤリこじ開ける。動かない眼球が天井を見る。

天井に刻まれた数字。鼓動が一度、ドクンと鳴る。

武田「見ろ！予知が役に立つ事もあるって証明してみろ。間に合え！今、見ろ」

御堂の瞳に焦点が戻ってくる。

御堂が見ている光景...天井。そこに刻まれた数字。自分が刻んだ数字。

ふと重みに気付いて下を見る御堂。

そこには、心底心配そうに自分を見つめる羽角がいる。

御堂「(激しく動揺する)え？ な、に？...なん、で??」

心臓が跳ね起きる。活動を再開した途端、とてつもなく早い鼓動を繰り返す。

羽角「先輩！（思わず抱きつく）」

羽角に抱きつかれて、御堂の身体は硬直しつつも、心臓は更に高鳴る。

N「マジで?...生き返った...」

佐久間「どうなってんだ？」

服部が老医師を連れてくる。

医師「心停止という患者は？どこ」

羽角が御堂に手を挙げさせる。なぜか、御堂の上に乗ったまま動こうとしない。

御堂「あ、あの、葉科、さん？」

羽角「(照れて赤面)すみません。安心したら、身体中の力が抜けちゃって...その、動けなく、なっちゃいました」

御堂「え?... (嬉しい)」

医師「ああ、構わんから。そのままです」

N「羨ましいヤツ」

診察を受ける御堂。その間も、羽角と見つめ合って、照れ戸惑っている。

医師「ペースメーカーは壊れとるが、心臓はちゃんと動いとる。早くちゃんとした設備のある病院へ連れてけ」

武田「助かるんですか？」

医師「そう言っとるだろう」

全員が喜び騒ぐ。拍手や叫び。

医師「ペースメーカーってのは不整脈を正常な脈にする為の物だ。コイツは今、一時的にこの状態だから緩和されとるに過ぎん。死なせたくなかったら、二人をこのままで連れて行くように。じゃ」

言うだけ言って去って行く。

御堂「え？あの、ちょっと」

羽角「あの...すみません、先輩。重く、ないですか？」

御堂「え？あ、はい。全然、大丈夫、です」

羽角「あ...そういえば、大事な話があるって言ってませんでしたっけ」

御堂「え？あ、その、それは...」

羽角「はい」

御堂「その、葉科、さんと、柿本が、付き合ってるって、聞いたから...その」

羽角「?...何の事ですか？」

サッパリ思い当たらない羽角は、不思議そうに御堂を見つめる。

そっと様子を窺っていた柿本は、見つからないようにコソコソとこの場から逃げていく。

が、御堂はそれに気づき、真相を知って安堵のため息をつく。

羽角「?...御堂先輩？」

御堂「いや、その...何でもないよ。何でも」

改めて、抱き合ったままの状況が恥ずかしくなってきた、目を合わせられない。

羽角「先輩？大事な話って」

御堂の心臓は、早過ぎるくらいの鼓動を力強く打ち続けている。

W大学院キャンパス（夜）

野次馬も集まって、一帯は騒然としている。

救急車に運ばれていく御堂と羽角。

抱き合ったままの二人に、驚きと冷やかしの歓声が浴びせられている。

が、どうやら見つめ合っている二人には雑音は聞こえないらしい。

佐久間「いいなあ」

服部「いいっすねえ」

佐久間「うらやましいなあ」

服部「そうっすねえ」

佐久間「ちょっとヤラしいな、何か」

服部「ヤラしいっすよね、何か」

佐久間「妄想わいちゃうよな」

服部「妄想わいちゃいますね」

N「誰かコイツらを黙らせてくれ。感動が薄れる」

武田は、疲れた笑顔で御堂と羽角を見ている。

気付くといつの間にか、隣に一枝が立っていて、思い切り驚く（ビビる）武田。

一枝「ご苦労様でした」

武田「...はあ、どうも」

一枝「ここまで近づいてようやくわかったんですが、彼も能力を持っていたようです」

武田「へええ...え？御堂が」

一枝「自分に関する事のみ、少し先の事がわかるみたいです。そういう人は割と大勢いますが、彼には自身の不幸に関するものだけが見えてしまうようです」

N「そりゃまた、難儀〔なんぎ〕な能力だことで」

一枝「見た通りの不幸が、必ず自身の身に起こる。自殺の原因の一端は、そんな能力に嫌気がさしたのかも知れない」

武田「...でも、アイツ今、嬉しそうだけど」

一枝「ええ。あの二人、相思相愛みたいですからね。でも、巧くいけば嬉しいんでしょうけど...」

少し目を伏せて、言い淀む。

武田「? ...どうかしたんスカ」

一枝「(毅然と)いえ。それでは、報告書作成をお任せしますので、よろしく。他の支部にも報告するものですので、遅くとも明日の出勤までには提出して下さい」

N「ゲッ? ...」

一枝は、颯爽と踵を返して、去って行く。

佐久間「頑張れよ、武田」

服部「ご愁傷さま」

大島「よくやったな、武田。じゃあな」

さっさと帰っていく3人。

N「うそォ?」

立ち尽くす武田。ただ、茫然と...

字幕「一ヵ月後」

渋谷・駅東南側

武田がノンビリ歩いてくる。WINSへ吸い込まれていく大勢の人の流れを、何気なしに見やっけて軽くため息づく。

N「平和だねえ」

サッサと通り過ぎる。向かうは職場。

予知課

課員が思い思いにくつろいでいる。

そこへ、ノックと共に加奈子と、もう一人、御堂が入ってくる。

加奈子「皆さん。今日から新しく配属された新人の、御堂友康さんです」

御堂「え、あの...よろしく、お願いします」

お辞儀する御堂に、全員がバラバラによろしくと声をかける。

加奈子「では、後はお任せします」

石川「ご苦労様です、支部長」

加奈子が出て行くと、課員はまた思い思いにくつろぐ状態に戻る。

御堂「.....(突っ立っている)」

とりあえず、武田のところへ来る。

御堂「あ、あの、先日は助けてもらって、その、お礼もまだ...」

武田「どう? うまくいったんの」

御堂「え?」

武田「彼女と」

御堂「え、いえ、その...お陰さまで(照れまくる)」

N「助けなきゃ良かったかな、コイツ」

武田「あ、そう、良かったね」

読んでいた資料(「能力発現トリガーの具体例、統計レポート」)に目を戻す。

そのかたわらで、御堂はただボケッと突っ立っている。手持ち無沙汰だ。

御堂「あ、あの...僕は、何をしたら、いいんでしょうか？」

武田「ん？...そうだね」

他の課員たちは、自分の事をしながらも、チラとだけ武田たちを盗み見る。

武田「そうだね、まずは...」

御堂「はい」

武田「くつろいでて」

御堂「...え？」

武田「(笑) ノンビリやろうよ。座ってさ」

他の課員たちは、何気ない風で、また自分の事に戻る。

N「あれ以来、俺もやれる事はやっておこうと思うようになってる。でも、それを後輩に強制するほどには、俺もまだココの事とか、能力についての詳しい事を、良く知らない。だから、ゆっくり慣れていく事にすればいい。こいつ共々」

窓の外を見やる。

N「それでもやっぱり...今日もまた、ヒマを持て余しそうだ」

寝入っている爽。大きなあくび。

終

よちか。

<http://p.booklog.jp/book/56184>

著者 : b-ryuf-b

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-ryuf-b/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56184>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56184>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ